オケ動詞

どんな集団も、多かれ少なかれ、特有の言葉を持っているものです。それは、部外者には理解しにくいのですが、仲間うちでのコミニュケーションをスムーズにするという、重要な働きをしています。

アマチュアのオーケストラという一種独特な世界で既に数年間をすごしてきた私達は、普段の会話の中でそういった言葉を随分使っているようです。その中には、誰にでも耳慣れた動詞を特別な意味合で使っているものがあります。

そこで、我々と同類の物好きなアマチュア音楽家ではないにもかかわらず、今晩の演奏会を聞きに来てくださった方々に、そのいくつかを御紹介したいと思います。

飛び出す　指揮よりも早く、他の人達よりも早く、音があってはならない時にひとりで音を出してしまうこと。自信をもってフォルテで弾き始めた瞬間、心ならずもソリストになってしまった時の心境は如何。自信をもって出ただけ全体への影響は大です。「飛び出すな！　オケは急に止まる」

走る　曲の途中で部分的に、テンポが無意味に速くなる現象。当人に自覚症状がなく、無意識のうちに速くなってしまうのが特徴。楽曲の解釈上、意識的にテンポを速めるのは、決して「走る」とは言いません。無意識なだけに、アンサンブルが乱れてきて初めて「何か変だわ」と気づくのですが、その時はあとの祭り。

走りやすい所というのは大体相場が決っていて、二種類あるようです。ひとつは、譜面が急に細かい音符で黒々としてきた時。そのままのテンポなら無事に通過できたかも知れないのに、逆上のあまり走り出してしまう自滅型。もうひとつは、自分の譜面が余りに単純で簡単なためについ走りたくなる場合。他のパートに対する思いやりを欠く自己中心的なタイプです。

練習に遅刻しそうな時でも、楽器をかかえて走る人は決していないのが、オケの不思議なところです。その落ち着きを演奏中も忘れなければ良いのですが……。人が聞いていると一層発病しやすくなる困った病気。

落ちる　指揮者及びソリストが熱演のあまり、足を踏みはずして、ステージから客席に落っこちることではありません。(そういう話もどこかであったようです)　演奏中に音楽の進行から落ちこぼれること。即ち、楽譜には出すべき音が書いてあるのに出そこなって音が抜けたり、他の人が一体どこを演奏しているのかわからなくなったりすることです。

練習中に落ちた時は「○○君の演奏があんまり素晴らしいので、つい聞き惚れてしまって……」というのが、言い訳の常套手段。言い訳の出来ない演奏会では、練習を重ね、神経も集中しているので、めったに落ちることはありませんが、それでもまれには本番で落ちることがあります。それが構成の複雑なフーガだったりすると、さあ大変。復活は非常に難しくなります。でも実際にどこかであったとか。

きざむ　きざむというとキャベツやキュウリがすぐ頭に浮びますが、あながち無関係でもありません。トントントンと調子良くキュウリをきざむ、その音は時間を刻んでいます。これがまさに私達にとっての「きざみ」なのです。楽譜の上では、8分音符や16分音符等ある一定の長さの音符が特定の音程で連続して現われることになります。

均一な長さの、しかも均質な音を均等に出し続けるのは、機械的作業で一見簡単そうですが、機械ならぬ我々には至難の技です。また、その単純な音型にも音楽があり、譜面づらは単純で簡単に見える第2ヴァイオリンやヴィオラの難しさ、そしておもしろさは、そこに潜んでいます。